けである。

② 吉田漱氏の「茂吉の〝鴨山〟追尋――その歌学的方法と態度――」（「未来」昭45・10）は題名の示すとおり茂吉の「鴨山考」に焦点をあてた研究で拙稿も種々教示を受けた。ただし、講演筆記というものの性格から、対象への迫り方には差が見られる。

③ 引用した『万葉集』の歌の書き下し文の表記は「鴨山考」などに見られる茂吉自身の表記法にしたがった。

然だかといふことが分かる。」と江川中流域に注意の目を向け、浜原に「亀」という地名を発見してここを昔の「鴨」と推定、そこから眺められる津目山を「鴨山」に擬した。ところが「鴨山後考」に記されているように、地元の苦木氏の指摘によって、湯抱の地に現に「鴨山」と呼ばれている山のあることがわかると、茂吉は即座に先の津目山を鴨山に擬する説を撤回して湯抱鴨山説に転向した。ところが、湯抱の鴨山は江川と約五キロメートルほど隔たっていて、津目山のように麓を江川が流れているわけではなく、ただ女良谷川（めらだにがわ）（湯抱川）という小流があるにすぎない。それなのに茂吉は「鴨山後考」で一旦、湯抱の鴨山を人麻呂の没した所と決めると、先に「鴨山考」であれほど大きな流れということにこだわって江川沿岸でなければならぬとしたにもかかわらずそのことに全く頓着しなくなってしまうのである。

このように、茂吉が提出したところの、人麻呂の没した場所を湯抱の鴨山とする説にはいくつもの難点が認められる。しかし、彼のこの説は、今日に至っても影響力をもつ有力な説であって、学界や歌壇にこの説に従う人が少なくない。

たとえば沢瀉久孝氏の『万葉集注釈　巻第二』（中央公論社　昭33・4）は湯抱鴨山説を全面的に支持している。戦後に書かれた『万葉集』の注釈書のうちでも訓詁注釈に最も詳しいこの書物は語句や人名・地名等について各所に詳細な独自の考証を行なっているのであるが、この湯抱鴨山説に関しては全面的に茂吉を支持している。

また、『万葉集』に歌われている風土についての最も代表的なガイドブックである犬養孝氏の『万葉の旅　下』（社会思想社　昭39・7）は「茂吉の説にも難点はつけられ確定はしがたいとしても、人麻呂によせる茂吉のひとすじの執念はもう湯抱の山峡からはなれることはない。」と茂吉の説に問題点のあることを認めつつも、「鴨山」の写真としては湯抱の鴨山を掲げている。

「鴨山」の所在を未詳とする場合でも、小学館の『日本古典文学全集』の『万葉集　一』（昭46・1）の「鴨山」についての説明を見ると、「所在未詳。島根県邑智郡邑智町湯抱の鴨山（三六〇メートル）かという説もある。」と記されている。所在未詳とはしつつも、このように茂吉の説いた湯抱鴨山説を諸説の中の筆頭におく例が多いのである。

このように茂吉の説が広く受け入れられている理由について考えてみると、人麻呂の終焉歌群を虚構と考えることなく彼自身の体験を歌ったものと考えるかぎりにおいて、茂吉の発見した湯抱の鴨山が、この歌群を読む者に実感を与える景観として最も自然に受け入れられるものをもっているからであると考えられる。

「鴨山考」をはじめとする茂吉の万葉研究には、科学的な論証という観点からすれば、主観に基づく飛躍があって、そこに弱点の存在することは確かである。しかし、これを詩人茂吉が取り組んだ「柿本人麻呂論」として見るならば、いかにも茂吉らしい独自の論ということになるのであって、『柿本人麿』全五巻は歌人斎藤茂吉が、彼の最も尊敬する歌人柿本人麻呂のあるべき姿を世に示そうと営々と努力を積み重ねて構築した産物といえる。そして、その点からいえば茂吉はその目的をほぼ達成したと見てよいであろう。

**注**

① 『総論篇』の名は、第二巻『鴨山考補註篇』以下に対して著者みずからそう呼んだので便宜の上から用いることにするが、書名としては『柿本人麿』とあるだ

伊藤博氏の『万葉集の歌人と作品　上』（塙書房　昭50・4）になると、人麻呂の終焉歌群は全くの虚構の作で、宮廷的な場において披露され享受されることをねらって作ったものとする人麻呂を「歌俳優」とする説をとっている。

このほかに、折口信夫の「柿本人麿」（春陽堂『万葉集講座　①作者研究篇』昭8・2所収）のように、この歌群を人麻呂やその妻の実作とは見ずに、巡遊詩人が幾代にもわたって語り伝えた伝承で、それが人麻呂かその妻の作と仮託されたものという考え方もある。

次に、茂吉があげた③の条件、人麻呂が晩年に役人として石見の国に赴任していたとする点についても、いま紹介した神田・伊藤・折口の各氏はいずれも認めていない。この点について稲岡耕二氏は「石見相聞歌と人麻呂伝」（「万葉」昭55・3）において石見相聞歌が短歌とせずに「反歌」と記していることやこの歌の中に用言にかかる枕詞の用例が少ないことなどを理由に、持続六年（六九二）以前の作とする見解を示している。このことが認められると、晩年に人麻呂が石見の国に役人として赴任したとは考えられなくなる。

このように人麻呂終焉歌群について様々な説が提出されているということは、茂吉が掲げた三条件には問題点が多く、無条件には承認しがたいと諸先学も考えておられるということである。もしも茂吉が考えるように例の歌を人麻呂とその妻が石見の国において実際の体験に基づいて詠んだとするならば、次のような疑問が生じてくる。

㈠持続・文武朝に宮廷歌人として中央で活躍していた人麻呂が、なぜ石見の国の湯抱というような山中に赴いて死ぬことになったか。

㈡人麻呂が旅の途中に山中で急死したとするならば、そのようなときに辞世歌を詠む余裕がはたしてあっただろうか。また、彼の辞世歌や妻の歌ったという挽歌がどのような過程を経て『万葉集』に収められることになったか。

㈢題詞には石見の国で死んだとあるのになぜ河内の国とかかわりのある地名が多く出てくるのか。

今まで見てきたように多くの疑問をさしはさむ余地があるのにかかわらず、それについての吟味なしに、冒頭から三条件を提示してそれを前提に「鴨山」探索に邁進する茂吉の研究の進め方は学問的な態度といえず、その主張は説得力を欠く。

このような主観的な態度は、右の三つの前提条件だけにとどまらない。「鴨山考」を見ると、各所に「『石川の峡』に相違ないといふ気持が殆ど電光のごとくに起つた」「神明の加護があるのではあるまいかとさへ思へた」などという表現が見られる。その点については茂吉自身も「かういふことを言へば、この文章を読む人々は或は失笑するかも知れない」「世の人は私のかういふ主観的な言ひ方に忍耐せられたい」と自身も気づいているのであるが、それほどに強い主観に基づいて物事が判断され、話が進められている。

その結果、彼が発見したという「鴨山」についても彼の主張は前後で撞着することになってしまった。すなわち、茂吉は「鴨山考」では、「依羅娘子の第二の歌に『石川に雲立ち渡れ見つつ偲ばむ』といふのがある。この歌で見るに、石川といふ川は、今までの諸説にあつたやうな小さい川でないことが分かる。大きい川で、山の狭間を流れてゐる川の感じである。」と、歌の印象をもとに「石川」を山峡を流れる大きい川でなければならないと推定した。そして、「高津川、浜田川、恵良川等は『石川』と普通名詞的に名づくべき特色を欠き（中略）自然、この浜原あたりを中心とする江ノ川区域を石川と呼ぶことの奈何に自

年まねくわれの恋ひにし鴨山を夢かとぞ思ふあひ相ひつる
我身みづから今の現にこの山に触りつつ居るは何の幸ぞも
人麿がつひの命をはりたる鴨山をしもここと定めむ

と歌った。これらの短歌は「湯抱」と題して『寒雲』に収められている。

以上、四ページからここまで、紹介が長いものになったが、茂吉が人麻呂の辞世歌に出てくる「鴨山」を粕淵の津目山、のちにそれを改めて湯抱の鴨山と推定する経過を、彼の書いた「鴨山考」「鴨山後考」によりながら見てきた。ここで、茂吉の主張についてその批判説を紹介しつつ検討することにしたい。

まず第一に、茂吉が「鴨山考」の冒頭で約束したところの

①「人麿が石見国で死んだといふことを認容すること」

②「石見娘子、依羅娘子が同一人であり、且つ人麿歿時に依羅娘子が石見に居つた、この二つを認めること」

③「人麿は晩年、石見国府の役人としてゐたこと」

の三つを前提条件として認めることは適当であろうか。この三条件は、茂吉が「愚見を記載して行くに際して、先づ次の事項を認容して貰はねばならない」、「若しこの認容が駄目ならば、愚考は成立しないのである。」といっているとおり、「鴨山考」の成立するか、しないかの重要なきめてなので、この条件について検討してみることにしよう。

『万葉集』巻二、二二三番の人麻呂の辞世の歌の題詞には、「柿本朝臣人麿、石見国に在りて死に臨みし時」とあるから、この題詞を信じれば、人麻呂は石見の国で死んだと考えられる。しかし、『万葉集』においては、題詞が歌の成立の事情を必ずしも正しく説明していないという場合が往々にして見られるので、その記述を全面的に信じるのではなく、一応は疑ってみることも必要である。そこで考えてみるに、この歌を人麻呂の実作と仮定した場合でも、危篤の状態で詠んだというのであるから、題詞の作者は彼自身とは考えられず、歌の伝承者あるいは『万葉集』の編集者によって書かれたものと判断される。となると、歌の制作された時点から時間がたち、その間に伝承が加わるなどという場合も想像されるから、題詞の記述をそのまま事実であったと考えるのは適当ではなく、茂吉のあげた①の条件も一応は疑ってみるのが科学的な立場であると考えられる。

その点で、神田秀夫氏は『人麻呂歌集と人麻呂伝』（塙書房　昭40・4）において、題詞の「石見国に在りて」の文字を疑っており、また茂吉のあげた②の条件の、依羅娘子が石見在住の女であるということも認めず、人麻呂死没の場所や依羅娘子の住所など人麻呂終焉歌群の舞台をすべて石見の国から畿内に移して考えている。これは一連の歌群に出てくる「鴨山」「依羅」「石川」「丹比」の名が河内の国の地名にあることに着目したもので、神田氏は葛城の高鴨を越えて河内の丹比に住む依羅娘子のもとに通ふ途中で急病のために死んだと考えている。

これに対して、土屋文明氏の『万葉集私見』（岩波書店　昭18・7）、『万葉紀行』（改造社　昭18・12）は茂吉の①の条件、人麻呂が石見の国で死んだということは認めるが、②の依羅娘子を石見在住の女とする点は認めず、娘子を河内の女と考え、鴨山・石川もその近辺の地名と考えた。そして人麻呂の住んだと考えられる北葛城郡柿本村に近い櫛羅村に鴨山口神社があるところから、ここを登山口とする葛城・二上連峰のいずれかを鴨山といったと推定、その西麓を流れる石川を二二四番歌に歌われた「石川」であると考えている。

んだと推測している。

以上のように考察を進めてきた茂吉は、第十章で全体を要約して結論としている。そこで述べていることをさらに要約して記すと次のようである。人麻呂の妻依羅娘子の歌に「石川」と歌われているのは江川のはずだ。そして人麻呂の歌の「鴨山」というのは江川の中流の岸に位置する邑智郡粕淵村の津目山であろう。人麻呂は慶雲四年夏、石見の国に悪疫が流行した時、国府の役人として出張してきて浜原あたりで自身も病気となり、対岸の亀、すなわち「鴨」の地のすぐ右手にそびえる山を見て「鴨山の磐根し纏ける吾をかも知らにと妹が待ちつつあらむ」と詠んで死んでいったのであろう。

これが「鴨山考」の結論で、以上のようなことを茂吉は「鴨山考」と題して雑誌「文学」の昭和九年十月号に発表した。「鴨山考」は同年十一月に刊行された『柿本人麿　総論篇』にも収められ世に出た。

なお、この年の七月、茂吉が島根県を訪れて、彼が「鴨山」と考えた津目山を初めて眼前にしたとき、その感激を「浜原」と題して次のように歌っている。

夢のごとき「鴨山」恋ひてわれは来ぬ誰も見知らぬその「鴨山」を

江の川濁り流るる岸にゐて上つ代のこと切りに偲ぶ

この二首はいま『白桃』に見ることができる。

昭和九年秋に茂吉が「鴨山考」を発表して、人麻呂の死んだ場所を邑智郡の浜原とする説を発表すると、従来、人麻呂終焉の地として信仰を集めてきた高津町の柿本神社では、町当局の支援を得て、地方の歌人や郷土史家を糾合して研究会を開くなどして、茂吉の説に反対し、高津説を宣伝する運動を展開した。そのことを新聞で知った茂吉は、十月二十七日、次のように書いている。「いづれにしても、人麿歿処高津説は感心し難い説である。これは幾たび繰返しても同様であるが、一体、拙著『柿本人麿』の人麿歿処の文献を読んで、なほ高津説などを固執しようとする学者は、現代にあつて誰と誰とであらうか」（『柿本人麿　鴨山考補註篇』所収「人麿歿所高津説に就て」）。彼の「鴨山考」についての確信の程が察せられる。

このような確信のもとに茂吉は、昭和九年、「鴨山考」を発表して、「鴨山」は島根県邑智郡粕淵村の津目山であると主張したのであったが、昭和十二年になってその主張を変更する必要に迫られる。

そのきっかけは、同年一月七日付で邑智郡粕淵村（現、邑智町）湯抱の苦木虎雄（のち、波多野姓）という青年から、湯抱に土地の人々が「鴨山」と呼ぶ山があるという手紙を受け取ったことにあった。茂吉が苦木青年に土地台帳を調べてもらうと

湯抱村鴨山　第五百廿五番　七等雑木山

と確かに「鴨山」という山の名が見つかった。茂吉は十二年五月十五日、土屋文明夫妻と共に湯抱を訪れ、現地調査の末、人麻呂の終焉の地は、この湯抱の鴨山であると判断、そのことを「鴨山後考」と題して雑誌「文学」の昭和十三年一月号に発表し、のちに『柿本人麿　雑纂篇』（昭15・2）に収めた。

この鴨山は茂吉が先にそれと推定した津目山の西北方、約三キロメートルの所にある湯抱温泉よりさらに奥へ一キロほどの所にあって、海抜三百六十メートル、麓を流れる川の水面からでは二百七十メートルほどの山である。

茂吉はこの山を初めて見た感激を

のであつた。かういふことを言へば、この文章を読む人々は或は失笑するかも知れない。けれども、石見国にあつて、『石川に雲たちわたれ見つつしぬばむ』の語気に異議なく腑に落ちてくる山河の風光はこのあたりを措いてあるか否か。

私はこの歓喜の心を押ししづめながら、荷を置いたまま直ぐ出掛けた。そのとき雲が非常に早く空に動いて惣ちにして雨が降つて来た。その雨の中に立つて、江ノ川とその向うの山々に雨雲の動いて居るのを見てゐると、依羅娘子の歌をようく理解し得るやうな気持がする。娘子は人麿が死んだとき石見にゐたとせば、国府或はそこから数里離れた都濃津（角の里）あたりにゐたと想像していい。恐らくは国府（今の下府）に居たのであつただらう。そして、人麿の病の重篤の知らせも間にあはず、人麿の死の知らせを得、病歿のありさまなどを聞きつつ、『けふけふとわが待つ君は』、『石川に雲たちわたれ見つつ偲ばむ』と歎いたのであらう。或は娘子は鴨山まで行つてもかまはない。第二の歌はさういふ気持をおこさせる歌である。いづれにせよ、その石川はこの歌の語気から見て、決して一寸した小川のやうなものではない。そこでこの江ノ川の発見が重要な役目を果すこととなるのである。

私はそれから雨を犯して、妙用寺の境内にのぼつて行き亀村の方を展望していた。妙用寺は臨済宗東福寺派末派で、正和三年（西暦一三一四）佐和善四郎実連の創立になつたといふ縁起のある寺で、浜原の東方の山の麓の小高いところにある。そこに立つと眼下に浜原村が見え、江ノ川を隔てて、対岸の一段高いところに亀の人家が散在して見える。亀の後ろには山が幾つか続いてゐるが、そんなに高くはない。その山には登尾、夏焼、大井後、御堂ケ埆、智恩院山などの小字のあるところで、是等の山を鴨山とするには適当ではない。然るに直ぐそれらの山の、向つて右手に相当に高く巖石あらはれ白雲のいそがしく去来する山が聳えてゐる。これは粕淵村にある津目山である。地図で見るに江ノ川を隔てて亀から西方に聳えてゐるから、亀の山、鴨の山、鴨山とは云はれないやうに思ふが、実際に見ると、亀につづいて直ぐ右手に見える山で、山をいふならば、先づこの山を云はねばならぬ趣である。私は直ぐこの津目山を以て人麿の歌の鴨山だらうといふ見当をつけた。そして、その日の夕方も来て見、次の日も来て見、また次の日も来て見たが、鴨山はこの山でなければならぬといふ程までになつた。東京にゐて見馴れない地図の上で想像してゐたのと違ひ、計らずも目のあたりこの山を見たとき、私の身に神明の加護があるのではあるまいかとさへ思へた程である。世の人は私のかういふ主観的な言ひ方に忍耐せられたい。

このように津目山を連日にわたつて眺めた末にこの山こそ人麻呂の辞世歌に歌われた「鴨山」であると考えるに至る。

このような確信をいだいた茂吉は、つづいて人麻呂が国府から遠く隔たった山中にある浜原の地までやってきた理由について考えをめぐらす。そして、浜原の小字の名に、スバイ釜、釜スリ、庭釜、鍛冶屋床などのような製鉄・冶金との関係が予想される地名の多いことに着目し、この辺で砂鉄による製鉄が行なわれていたのではないかと推定した。そして、彼は『続日本紀』の慶雲四年（七〇七）四月の条に丹波・出雲・石見の三国に疫病が流行したことが見えているので、国府の官吏であった人麻呂は、この年の夏、伝染病のはやる浜原に救恤あるいは視察のために出張して、そこで疫痢のような病気にかかって死

日本地名辞書』が説いている。これについて茂吉は、神村も国府から近すぎるし、「鴨山」らしい感じの山が見当らないといって否定する。㋓江津市恵良説―恵良は㋒の神村の近くの部落の名で、『二宮村史』が主張する説。同書によると、人麻呂は四十八歳のとき熱病にかかって恵良で死んだが、そのとき病気の人麻呂の熱をさますため透床という床をこしらえ、石の枕で休ませた。そのためこの地には「柿の木本」「スイトコ」「四十八」「マクライ」等の地名が残るという。この恵良説についても茂吉は㋒の神村説の場合と同様に、国府から近すぎるし、「鴨山」にふさわしい山がないと難点をあげて否定している。

このように茂吉は現地踏査の結果もふまえて四つの説を一つ一つ否定した。彼は「鴨山考」を発表するまでに三度にわたって島根県を訪れ、踏査を行なっている。その第一回は昭和五年十一月のことで、右の㋐の説の現地、益田市を訪れ、高津の柿本神社に参拝した。二回目は昭和九年五月で、㋐㋑㋒㋓の四つの現地を訪れた。三回目は同じ年の七月で、今回も四箇所をそれぞれ訪れている。このように現地を調査した結果に基づき、茂吉は㋐㋑㋒㋓の四つの土地は人麻呂の辞世歌に歌われている「鴨山」に適当でないとして全て否定したのであった。

これまでに提出されてきた説をいずれも否定した茂吉は、第三章では新たに「鴨山」を捜す手掛かりとして、その山は石見の国府から十四、五里隔たった場所でなければならぬという。それは、人麻呂の妻依羅娘子の歌ったという二二四番歌に「今日今日と我が待つ君は石川の貝に（一に云ふ、「谷に」）交じりてありといはずやも」とあって、人麻呂の臨終に傍へ駆けつけられなかった趣である。その理由を茂吉は妻の住む国府辺から遠く隔たった所で人麻呂が病気になり倒れたためであると考える。そして、その距離を茂吉は「少くとも国府から十四五里隔つた処と考へねばならぬ。」と推測する。そして、二二五番歌の「石川に雲立ち渡れ見つつ偲はむ」から、「石川」を「大きい川で、山の狭間を流れてゐる川の感じである」とも推定、このような二つの条件を満たす場所を島根県下で捜した末に、茂吉は江川の沿岸に目をつけ、「この江ノ川沿岸といふ考は極めて大切な根拠で、将来また新説は出ようとも、これは永久に間違つてゐないと信じていい」とまで確信する。

こうして江川沿岸に「鴨山」に擬すべき山を求めていた茂吉は、かつて買い求めておいた『石見由来記』という写本を見ていて、江川の川岸に「亀」という村のあることを知る。茂吉は第四章以下、第十一章まで八つの章をこの亀の地で人麻呂が病没したと推定する理由の説明にあてている。参謀本部発行の五万分の一地図や慶安および享保年間作製の石見の国の古地図にも「亀」という地名が記されていることを確認した茂吉は、カメ（亀）という地名はカモ（鴨）という音の変化したものと推定し、亀村の現地調査を行なう。亀の地は邑智郡浜原村、現在の邑智町浜原にあって、その地を訪れた日のことを茂吉は第七章で次のように書いている。

依羅娘子の歌にある石川は浜原あたりの江ノ川のことだとし、石川の貝は石川の峡だとして、さう大体想像を極めて、昭和九年七月二十一日石見国太田（ママ）に一泊し、翌日乗合自動車で浜原に着いたのは午前十時過ぎであつた。雨やうやう晴れ、江ノ川が増水して、いつぱいになつて濁流が流れてゐた。粕淵を過ぎて浜原に入らうとするところから江ノ川を眼界に入れつつ、川上の浜原、滝原、信喜、沢谷の方に畳まつてゐる山を見るに、なるほどこれは、『石川の峡』に相違ないといふ気持が殆ど電光のごとくに起つた

かったのであった。

その最初の論文が岩波書店発行の雑誌「文学」の昭和九年十月号に発表された「鴨山考」である。

この論文は四百字詰原稿用紙で七十二、三枚の分量で、十一章から構成されている。その第一章は序章で、このような研究に着手した理由について、「万葉歌人中の多力者であり、古来歌聖などと云つて尊崇せられた人麿の歿処が、折角歌の中に『鴨山』と示されてゐるのに、それが現在地理的に不明だといふのは、万葉集を顧慮し人麿を顧慮する者にとり奈何にも残念なこと」だといい、自分の考えについて学界の批判を仰ぎたいと述べる。そして「鴨山」を考証するにあたっては次の事項を認容してもらわねばならないといって、三つの前提条件を掲げる。

①「人麿が石見国で死んだといふことを認容すること」—これは『万葉集』巻二の二二三番歌の詞書に「柿本朝臣人麻呂、石見国に在りて死に臨む時」云々とあるのを事実に基づくものと考え、人麻呂が石見の国で死んだと認めよと要求するのである。

②「石見娘子、依羅娘子が同一人であり、且つ人麿歿時に依羅娘子が石見に居つたこの二つを認めること」—『万葉集』巻二の「相聞」の部の「柿本朝臣人麻呂、石見国より妻を別れて上り来る時の歌二首」と題する和歌（一三一～一三九）は人麻呂が上京するにあたって、石見に残る妻と別れる嘆きを歌っているが、ここで人麻呂が別れようとしている妻が、挽歌の作者依羅娘子と同一人物と考えることを容認せよというのである。

③「人麿は晩年、石見国府の役人としてゐたこと」—このことについては記録が全く欠けているが、中央政府から石見の国府へ派遣されてきていた役人と考えることを要求している。

以上の三つの前提を定めた上で、次の第二章では、従来行なわれていた、人麻呂の没所についての説、高津鴨島、浜田城山、神村、恵良の諸説について、実地踏査の結果もふまえながら、次のように批判している。

㋐高津鴨島説—島根県益田市を流れる高津川の河口に昔、鴨島という島があって、ここで人麻呂が死んだという古伝承に基づく説で、『万葉集』の注釈書では『檜嬬手』『古義』『攷証』『美夫君志』等がこの説を採用しており、従来は最も広く行なわれていた。ただし、この説でいう「鴨島」は万寿三年（一〇二六）に当地を襲った津波で没したと伝えられており、島は実在しない。この説について茂吉は次の理由により否定する。この説では一三二番歌の「高角山（たかつのやま）」を高津の山と解しているが、これは都濃津（つのつ）にある高い山の意であって、それをこじつけて解釈している。また、津波で鴨島が一夜で姿を隠したというのも信じがたい。この二つの理由により高津鴨島説を否定している。

㋑浜田市城山説—浜田市にある城山は、亀山とも呼ばれるが、「亀山」のカメはカモという音の変化したものという説である。写本『石見風土記』に説くのが最も古く、近代の『万葉集』の注釈書では次田潤の『万葉集新講』がこの説を採用している。この城山説に対して茂吉は、浜田は浜田市国府町下府にあった国府から近いから、その辺に住んでいたはずの妻は、人麻呂の病気の知らせを聞いてすぐ駆けつけられただろうから歌の趣旨に合わない。それに城山はあまりに低い山で、人麻呂の辞世歌の「鴨山の岩根し纏ける」という山の感じがないといって否定している。

㋒江津市神村（かむら）説—神村（かむら）は鴨村（かもむら）の音の転化と考える説で、吉田東伍の『大

地理集、人麿の墓所・祠廟、人麿影供・人麿碑文、人麿文献集
附録第一　鴨山考
附録第二　長谷川如是閑氏の人麿論を読む

茂吉の人麿についての研究は、『総論篇』だけを見ても、右のように多岐にわたっており、しかも綿密である。その綿密さを「第五　柿本人麿雑纂」中の「人麿文献集」を例にとって見ると、そこに古くは釈顕昭の「柿本朝臣人丸勘文」や藤原敦光の「柿本影供記」から始めて、『総論篇』の刊行の年である昭和九年までに発表された人麻呂に関する文献名四百三十点を、種類別、年代順に配列し、発行年、発行所、掲載誌名等を記し、主要な文献百九十点については内容の解説を付しているのである。

多岐にわたりかつ綿密な、茂吉の「自序」中のことばによれば「人麿百貨店」をめざしたという『柿本人麿　総論篇』は昭和九年十一月に岩波書店から発刊され、つづいて同書店から『鴨山考補註篇』(昭10・10)、『評釈篇巻之上』(昭12・5)、『評釈篇巻之下』(昭14・2)、『雑纂篇』(昭15・12)と刊行されてゆき、研究に着手してから七年後にようやく全部の完成を見た。

このように大がかりな茂吉の人麻呂研究のうちでもとりわけ彼が多くの年月を費し、努力をしたのが、「人麿の死及び没所」「鴨山考」「鴨山後考」としてまとめられたところの、人麻呂の死没した場所を探る調査研究であった。茂吉のこの研究は冒頭にも記したとおり特徴あるものなので、この「鴨山考」に焦点をあてて、彼の研究の跡をたどりつつ、その特質を探ることにしたい。

さて、柿本人麻呂については、『続日本紀』等の史書には全く記述が見当らない。人麻呂について知る上での基本文献は『万葉集』に限られ、死没した場所を探る上での資料となると、わずかにその巻二の挽歌の部に

柿本朝臣人麻呂、石見国に在りて死に臨みし時、自ら傷みて作りし歌一首

③鴨山の磐根し纏ける吾をかも知らにと妹が待ちつつあらむ　(二二三)

という人麻呂が死を前にして遺したという辞世歌と、それにつづいて人麻呂の妻依羅娘子が夫である人麻呂の死を嘆いて歌ったという

柿本朝臣人麻呂の死ぬる時に、妻依羅娘子の作る歌二首

今日今日と我が待つ君は石川の貝に(一に云ふ、「谷に」)交りて在りといはずやも(二二四)

直の逢は逢ひかつましじ石川に雲立ち渡れ見つつ偲ばむ(二二五)

の二首の挽歌があるだけである。二二三番の人麻呂の辞世歌に詠まれている「鴨山」という山がどこにあるのか、すなわち人麻呂がどこで死没したのかということについては、歌人や学者等の関心をひき、それまでにもいろいろな説が出されていたが、なにぶんにも資料が少ないので決定的な説といえるようなものがないままに今日に及んだのである。

茂吉は先に紹介した「柿本人麿私見覚書」「長谷川如是閑氏の人麿論を読む」の二編を書き上げたあと、昭和九年になって、人麻呂の短歌の評釈に着手するかたわら、人麻呂の死没した場所の調査に取りか

ばかりのころの畏怖を伴った人麻呂敬仰から、ようやく敬慕を伴った親和とでもいった心境へと変化したと考えられる。

先の文中には「私は人麿のものには到底及ばない」、「私の力量はつひに人麿には及びがたい」といった謙譲の辞が見えるが、このことばの裏には、自分をおいて人麻呂に続く歌人は後にも先にもありえないという自負が隠されているようで、そのような自信が、人麻呂を従来の畏怖の念ではなく親しみの気持で眺めることを可能にしたとも考えられる。

今まで見てきたように、茂吉は人麻呂に対して深い敬仰の念をもっていたのであるが、彼が実際に『柿本人麿』全五巻を執筆するようになったのには次のようなきっかけがあったようである。彼はそのことについて、『総論篇』の「自序」の中で、長谷川如是閑の人麻呂についての評論が雑誌「改造」に載り、それに対する意見を雑誌の編集者から求められた。これが『柿本人麿』の筆をとる契機となった旨を述べている。これは、総合雑誌「改造」の昭和八年新年号に如是閑の「万葉集に於ける自然主義――革命期に於ける政治形態との関係――」が掲載され、この評論についての感想を書くよう「短歌研究」の編集者の大橋松平に頼まれたことを指している。茂吉の日記によれば、この原稿依頼に対して一旦は執筆をことわったようであるが、この依頼がきっかけとなったのであろうか、この年の十月になって茂吉は人麻呂について集中的に執筆している。こうしてまず完成したのが『柿本人麿　総論篇』に収められた「柿本人麿私見覚書」（十一月二十一日に完成の模様）であり、引き続いて書かれたのが「長谷川如是閑氏の人麿論を読む」である。

「柿本人麿私見覚書」は十三章から成り、四百字詰原稿用紙にして百枚ほどの長さのもの。雑誌には発表されないで終わった。『総論篇』の「自序」には「不得要領の長々しきもの」になってしまったので雑誌への発表を見合わせたという記述がある。

つづいて書かれた「長谷川如是閑氏の人麿論を読む」の方は十二章から構成されており、これも四百字詰原稿用紙にして約百枚の長文である。この文章は題名から判断してもまた日記の記述から判断しても、如是閑の評論に対する駁論として執筆されたと考えられるにもかかわらず、これも文章が長くなったためか、雑誌への発表は行なわれなかった。「柿本人麿私見覚書」と「長谷川如是閑氏の人麿論を読む」の二篇は、共に翌年の十一月になって『柿本人麿　総論篇』に収められて初めて公けにされた。

『柿本人麿　総論篇』は次のように構成されている。

自序
第一　人麿伝諸記
　人麿伝記文献大要、柿本氏、人麿の本郷・生地、人麿の官位、日常生活其他、人麿の年齢、人麿の死及び没所、人麿の妻
第二　人麿作歌年次配列
第三　人麿評論史略
第四　柿本人麿私見覚書
第五　柿本人麿雑纂
　人麿の肖像、人麿と同名の人々、人麿地理集、人麿歌集

見覚書」（昭和八年十月から十一月にかけ執筆）においては、

私の人麿尊敬は、人麿もよし業平もよし貫之もよし定家もよし景樹もよし晶子もよしといふのではない。さういふ論は歌の歴史でもするときにいふべきことで、いよいよといふときには私は決してさういふことは云はない。私の人麿尊敬はいよいよとなれば人麿でなければならんといふところまで行つてゐる。

と書いている。このように、茂吉は作歌を始めた最初のころから万葉歌人の中で特に人麻呂に対し強い敬仰を示したのである。

この点を、茂吉に作歌の指導をした伊藤左千夫の場合と比較すると特色がはっきりする。左千夫は初期に発表した「新歌論」（明34）においては、人麻呂の荘重で雄渾な歌風を「文学の上乗なるもの」ときわめて高く評価していたのにかかわらず、茂吉が入門する直前の明治三十六年に発表した「万葉論」になると、人麻呂の歌は声調を過度に重視していると批判的な口ぶりを示すようになり、さらに「柿本人麿論」（明43）に至っては、「近江の荒れたる都を過ぐる時に、柿本朝臣人麻呂の作る歌」（巻一・二九～三一）について、「言語が徒に豊富で、内容は甚だ貧弱」であると、従来の学者や歌人たちの人麻呂評には見ることができないほどの峻烈な批判を行なっており、同時に人麻呂にかわって山上憶良の現実に即して生活の中から生まれる感懐を率直に吐露する歌風を高く評価している。

このように人麻呂の歌風に批判的になっていた左千夫の薫陶を受けたにかかわらず、茂吉は人麻呂に特に強い敬仰を示した。ここに彼の万葉享受継承の特色があり、本格的な人麻呂研究に着手することになった理由もそこにあったと考えられる。

茂吉は「柿本人麿私見覚書」の中で次のようにも言っている。

私は伊藤左千夫翁に師事し作歌を稽古して既に三十年である。その間常に人麿のことが私の心中を去来しつつあつた。（中略）三十年の過程を経て、このごろやうやく心の落著を得たやうな気持がするのである。人麿は私にとつては依然として尊びあふぐべき高峰である。そして私は今やそれに近づきつつあることを感ずるのである。人麿のものは私にとつて畏怖すべき存在であつた。然るに近時私は一種の親しみを以て相対し得るやうになつたのではなからうか。人麿のものに対する私の評価はこれまでも不断に幾分づつの動揺があつた。そして五十歳を過ぎた今日やうやくにして結論に到達したごとくである。私は、人麿のものには到底及ばないといふ結論に到達したごとくである。嗚呼私の力量はつひに人麿には及びがたい、とかういふのである。そして私の『力の程度』を以て辛うじてこの境界に到達したとおもふのである。よつて私は、以下人麿に関する覚書を記して記念とするのである。

この文章を執筆した昭和八年に茂吉は数え年の五十二歳になっていた。彼は五十歳を過ぎたこのころになって人麻呂についてそれまでとは違った考え方に到達したようである。

その前年の昭和七年の年頭にあたって彼は日記に

コノゴロ歌壇ニテハ僕ヲバ悪口ノ対象トナス。嗚呼予ノ歌ヤウヤク本格トナラントシテ罵詈ノコエヲキク。心中壮快ヲオボユ。

と書いている。茂吉はこのころ歌人として力の充実を感じるようになったらしいのである。彼の主宰する「アララギ」は昭和八年一月に「二十五周年記念号」を刊行し、同月二十四日に東京会館で祝賀会を開催している。特にこのころになって歌人として、また歌壇人として力の充実を意識し、自信を深めるようになった茂吉は、作歌を始めた

# 斎藤茂吉の人麻呂研究

## ——「鴨山考」を中心に——

貞光威

# An Analysis of Mokichi Saito's Study on Hitomaro

Takeshi Sadamitsu

斎藤茂吉が最初に発表した歌論「短歌に於ける四三調の結句」（「アララギ」明42・1）は主として「万葉集」から四三調の短歌を引いて声調について論じたものであったが、そののちも彼は生涯にわたって多くの「万葉集」に関する歌論、研究を発表した。この種の主なものには「万葉短歌声調論」（春陽堂『万葉集講座』第五巻　昭8・9）、『柿本人麿』全五巻（岩波書店　昭9・11～昭15・12）、『万葉秀歌』上・下（岩波書店　昭13・11）、『万葉の歌境』（青磁社　昭22・4）等があり、ほかに『短歌私鈔』、『続短歌私鈔』、『童馬漫語』、『小歌論』、『童牛漫語』、『歌壇夜叉語』等に収められた茂吉の歌論の中にも「万葉集」についてのものが多い。

茂吉のこのように膨大な「万葉集」にかかわる研究の中でも特に重要な位置を占めると考えられるのが柿本人麻呂についての研究で、それは次の五冊からなっている。

『柿本人麿　総論篇』[1]　昭9・11・10
『柿本人麿　鴨山考補註篇』　昭10・10・20
『柿本人麿　評釈篇巻之上』　昭12・5・10
『柿本人麿　評釈篇巻之下』　昭14・2・10
『柿本人麿　雑纂篇』　昭15・12・10

A5判の五冊からなるこの研究は、合わせると三九三四ページにも及ぶ大著で、歌人の立場から行なった人麻呂研究として注目されるが、『総論篇』中の「鴨山考」「鴨山後考」等の人麻呂の死没した場所についての調査・研究は彼が多年にわたって精力を傾けたもので、その方法は独自で特色をもっている。そのため、茂吉の評伝などはほとんどの場合、この研究について紙幅をさいている。しかし、今日、この「鴨山考」だけに焦点をあてて考察した研究となると管見ではほとんど見当らない。[2]そこで、この稿では茂吉の人麻呂研究の中の「鴨山考」を中心にして、その概要と進展の模様を探った上で、その特質について考察することにしたい。

まず最初に、茂吉が右のように人麻呂について本格的に研究を進めようとした動機は何であったか。

その点でまず注目されるのは、茂吉が多くの万葉歌人の中で特に人麻呂に深い関心をいだいていたらしいことである。茂吉は、「歌壇万覚帳」（「アララギ」昭3・1）の中の「人麿と赤人と」という文章において、

私は好みからいへば人麿に傾いて居り、これははじめからであつた。

と述べている。また、『柿本人麿　総論篇』に収められた「柿本人麿私